

## 座談会 ● 女性の〈活躍〉ホッソ座談会

佐藤律子 ・ 自治労東京都庁職員労働組合

芦川麻乃 ・ 自治労町田市図書館嘱託員労働組合

保井弘美 ・ 高松市職員連合労働組合

川崎真弥 ・ 徳島県病院局職員労働組合  
コーディネーター

青木真理子 ・ 自治労本部書記次長

女性にスポットがあたって、法律にまでなっているのに、どこかしっくりこない「女性の〈活躍〉」というコトバ。

なにが足りないのか、どこをはずしているのか。自治体のさまざまな職場からお集まりいただきホッソで語っていただきました。

二〇一六年三月五日 於：自治労本部

青木 二〇一五年八月に「女性活躍推進法」が成立しました。国や自治体、二〇一人以上の企業は、二〇一六年四月までに女性の活躍を後押しする計画を作ることになっていて、採用した労働者・管理職に占める女性の割合、労働時間などを調査し、数値目標を定めることなどが義務づけられました。でも、単に女性の採

ければと思っています。

### 現在の仕事について

佐藤 私は現在、東京都の女性相談センターで働いています。資格は保育士で、最初は知的障害のある方の施設、その後、重度の身体障害のある方の施設を経て、今の職場に移りましたが、ずっと交替制の勤務が続いています。今は女性の支援をする仕事なので女性が多い職場ですね。職員の年齢は四〇〜五〇代が中心で、子育てが大変な時期は過ぎましたが、そろそろ親の介護が必要になっていく方も多くて、そうしたなかで交替制の勤務をこなしているという状況です。

青木 女性たちが夜勤を回して行くのは、大変なことですね。

佐藤 そうですね。たとえば卒業式や入学式など休みが重なった場合は、勤務表を作る段階で調整しています。休暇制度の充実も必要ですが、チームで仕事をしているのです、お互いの状況を理解し合え

さとう・りつこ ●一九八六年、東京都七生福祉団に入職  
東京都日野療護園での勤務を経て、二〇一一年より東京  
都女性相談センターに勤務。自治労東京都庁職員労働組  
合福祉保健局支部支部長。



る職場をどう作っていくのかが働き続け  
るなかでは大事なことと思っています。

川崎 私は二〇〇〇年に徳島県中央病院  
に看護師として、最初は臨時職員、一年後  
に正規職員になって一五年ずっと同じ病  
院に勤務してきましたが、二〇一五年か  
ら組合の専従になったので、個人的には  
働き方が大きく変わりました。看護師の  
現状でいいますと、私が入った当時は平  
均年齢が四〇代でしたが、カルテの電子  
化などの影響で早期退職の方が増えたこ

ともあって、いまは平均で三四歳くらい  
と、どんどん若くなっています。そうす  
ると育児をしている方が大多数で、親と  
離れた核家族の方も多いですから、その  
なかで夜勤もこなさなければならぬとい  
で、佐藤さんがおっしゃったように、自  
分のいまの状況を職場のみんなに話をし  
ます。私はいまこういうサポートがいる  
んだというようなことをコミュニケーション  
しながら、みんなお互い様だよとフォ  
ローしあう状況をつくるのが一番、仕  
事をするなかで大切なかなと感じます。

芦川 私は二〇〇三年に町田市立図書館  
に嘱託職員として採用されました。当時  
は五年間の雇用止めがあつて、私も五年  
経ったら辞めるんだなと思つて入つたの  
ですが、当時の管理職の方たちが、嘱託職  
員は町田市立図書館になくってはならぬ  
存在だからということでも雇用止めをなく  
すことになって、五年経つても働き続け  
られる状況になりました。さらに、嘱託  
職員の処遇改善するには労働組合がな

いと私たちは管理者と同じテーブルにつ  
けないので、組合を結成して、産休育休  
などの休暇制度や、一律の昇級なども勝  
ち取つて今に至っています。そんななか  
で、私は二〇一三年に結婚一三年にして  
まさかの子どもをさずかつて、産休育休  
をいただいて、二〇一五年の三月に復帰  
をしました。四月から関連施設の町田市  
民文学館で司書として働いています。制  
度として産休育休があることがほんとう  
にありがたかつたですね。前向きに職場  
復帰をとらえられて、その間に何かでき  
ることはないかなと思つて、学芸員資格  
取得に挑戦し、あとは実習が残っています。

青木 正規職員だつたらあたり前と思つ  
ている休暇制度。非正規職員であれば不  
安定ですからよけいに重要ですよ。そ  
れを組合のなかでがんばつて勝ち取つて、  
さらに個人的に資格まで取るっていうの  
もすごいですね。

保井 私は一九九六年に旧香川町役場に  
入つて、二〇〇六年の合併で高松市の職

員になって、今は国民健康保険の窓口業  
務をしています。その前はスポーツ振興  
課というところに行きましたが、国保は残  
業が多いと聞いていたんですね。組合の  
女性部の役員をやっているものだから、  
だつたら私が行つて変えられることはな  
いかなと思つて、行つてみようと思つた  
んです(笑)。それで異動になつてみると、  
案の定、翌日にまわせばいいような仕事  
をやっていたりすることがたくさんあつ  
て、とにかく私は五時二〇分には席を立  
つということをやつたんです。そうす

ると徐々にですが、早く帰る人が増えは  
じめて、半年後には五時半にはその係は  
誰もいなくなるということになりました  
(笑)。次に今度は年休を二〇日とること  
を率先してやろうと決めて、「休んでもす  
ることがない」と言つてとらない若い職  
員にも、どんどんとることを進めて、い  
まは一五日以上はみんなが休むようにな  
つてきました。

仕事への意欲の源泉 やりがいについて

青木 さまざまな職場の方に集まつてい  
ただいたので、仕事内容についてもうち  
よつと、たとえば一番やりがいを感じる  
のつてどんな時ですか？

佐藤 私の仕事は利用者支援、対人支援  
なので、利用者から「ここに来てよかつ  
た」とか「ありがとう」と言つてもらえた  
りするのうれしいですね。利用者の支  
援を通じて、いろんな人と関係を作つて  
それが仕事としてやりきれたときは、や  
っぱりやりがいがありますよね。

川崎 看護師というのはサービス業なの  
で、佐藤さんと同じで、感謝されること  
でモチベーションがあがる、がんばれる  
というのはありますね。組合の専従の方  
は、まだ四ヶ月が過ぎたくらいなんです  
が、県立の三病院の組合員のみなさんか  
ら、看護師として働いていた時にはまっ  
たく知らなかつたような情報が毎日どん  
どん入つてきて、それに対して、私の立  
場はどう解決していけばいいのかという  
のを上司に相談しながら、解決できた時  
に、また組合員から組合に相談してよか  
つたとか言つていただけたら、ちよつと  
役に立っているかなと気持ちあげてい  
るところです。

芦川 私は本が好きで、人に接すること  
が好きで、それで司書になつたんですね。  
本と人が出会う場所でお手伝いをするの  
が司書の仕事だと思つているので、それ  
に携われてすごくうれしいんです。さら  
に「この本おもしろかつたありがとう」  
とか「この本を取り寄せてくれてありが



あしかわ・あさの ●二〇〇三年に町田市中央図書館に司  
書の嘱託職員として入職。二〇一五年四月より町田市民  
文学館に勤務。

やすい・ひろみ●一九九六年に旧香川町役場に入職。二〇〇六年、合併により高松市職員となり、スポーツ振興課勤務を経て、二〇一四年四月から国保・高齢者医療課に勤務。自治労香川県本部女性部副部長、高松市職員連合労働組合女性部長。



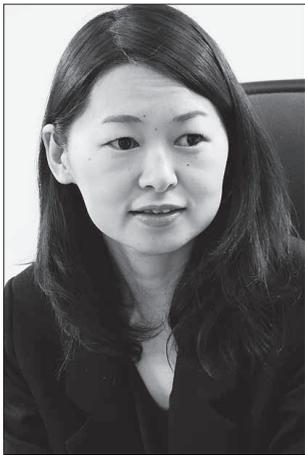
とう」とか感謝されるのはうれしいですし、自分たちが選んだ資料をお客さんが持つて行ってくれたりするだけでも、ほんとにうれしいですね。正規とか非正規とか関係なく、市民サービスの一端を担っているっていう誇りを持ちながら仕事を続けていられることをありがたく思っています。

保井 私の場合はやっぱ飲み会ですかね(笑)。窓口でポロカスに言われることもあるし、そういう時は次の日につなげ

青木 学校の先生の方が、お母さんがきてあたり前っていう感覚なんでしょう。川崎 私も女性の多い職場でしたから、

あまり不利益を受けたという印象はないですね。強いて言うなら、女性の看護師が言ってもきいてくれない患者さんが、男性看護師が言うとなんか聞いてもらえるところですかね。同じ看護師でも男性は医師みたいに見えているのかもしれないよな。

芦川 私も女性だからということはないんですけど、逆に数少ない男性司書に力



かわさき・まき●二〇〇〇年に徳島県立中央病院に看護師として入職。二〇一五年一月より徳島県病院局職員労働組合の専従書記長。

るためにも、飲みに行つて、みんなでわいわいしゃべつて、もうそれは忘れようよと、それでまた明日からがんばろうって感じでいかないと。やっぱお酒が入ると本音が出るじゃないですか。でもそういう場ならみんな聞き流しし、言いたいことも言えるし。

青木 リセットできるって感じですね。

保井 そうそう。私たちの年代でつこう飲み会年代なので、飲みに行くのもひとつの仕事だと私は思っているんですけど、最近の若い人はそうでもないみたいなんです。ちょっと悩んでいそうなのに誘えば、すぐ来てくれますから、やっぱ行きたいと思つているんでしょうね。青木 お話を聞いていると保井さんは職場のなかで、すごく重要な役割を担っているって感じですね。

### 職場よりも社会に残る古い価値観

青木 私は職場に入ったばかりのころに、

仕事を求めたりしてしまつて、もしかしたら、そういう面で負担に思つている男性の司書もいらつしやるかもなあと思

います。力仕事を断るなんて何？みたいなプレッシャーをかけているかもしれないですね。それから、やっぱ公共施設なので、いろんな方がいらつしやるので「女じゃ話にならない。偉い人呼んで」みたいなことをおつしやる方もいます。

保井 私もあまりないですね。異動してすぐの頃は、住民の方に質問されても答えられずに、上の者を出せという話にもなるんですけど、そこで私より上の女性が出て行つたら、「オマエは違う、男を出せ」みたいに言われたといったこともありましたが。同じ職場の男性になら、何でも言い返せますけど、住民の方に言われるとなかなか言い返せませんからね。青木 みなさんのお話をうかがつていると、職場というより、まだ社会のなかに残つている古い感覚の方が厳しく感じるということですね。

電話に出たら「誰かに代わつて」つて言われたことがあるんですよ。相手は男性で、要は女性では話にならない。男性を電話口に出せということですよ。女性を一人の人間として見ていない。最近ではそういうことも少なくなつているとは思いますが、工作上、女性だからという理由で不利益や、いやな思いをした経験などがあればお話をいただけますか。

佐藤 私はないですね。今の職場は係長一人が男性ということもあつて、みんなであれやこれや文句を言つたりしますから、むしろ不利益を被つているのは係長の方かもしれません(笑)。女性支援の仕事なので、相手も女性ですし、仕事上のおつきあいのある区市町村の方も女性だったりするので、女性だからといって何かという感じはないですね。ただ、私は土日に関係ない仕事ですから、保護者会や学校行事にあまり参加できなかったのですが、保護者会に父親が行くとジロジロ見られちゃうとかはありましたね。

### 仕事と生活の両立

青木 いわゆるワーク・ライフ・バランス、仕事オンリーではなく、私生活を充実させることで、仕事もがんばれるといううか、そういう時間を作ることも大事だと思つています。三人の子育て中の方もいて、時間のないなかで、組合活動もやつていらつしやる。どうやってたかさんのことにチャレンジできるのか、工夫みたいなものがあれば聞かせてもらえますか。佐藤 私の場合は、仕事の休みの日に組合の活動を入れて、家にいないことが多いため、やっぱ家族の理解は重要ですよ。また、職場の理解と協力は大きいんです。組合活動の関係で勤務の調整や変更してもらつても多いので、助かっています。

青木 組合活動がリフレッシュになつて、モチベーションアップにつながるとか？佐藤 そこまではないですが(笑)、さまざまな集会なんかに出て人の話を聞い

あおき・まりこ ●一九八五年田妻川町役場（二〇一一年合併により出雲市）に入職。建設課、生涯学習課、ふるさとデザイン課、企画財政課で勤務。二〇〇〇年から島根県本部女性部副部長、連合島根女性委員会委員長。二〇〇七年から島根県本部専従副委員長、二〇一一年から自治労本部執行委員、総合組織局、総合企画総務局をへて現在書記次長。



たりいろいろな人と話をすると、視野もひろがりますし、楽しいですね。だから、それを職場や家庭で話すようにしています。

川崎 私の場合は三交代の勤務をしていいたときは、土日も仕事だったので、子どもたちと家族で出かけることが少なく、そこはちよつと悲しいかなと思っていたこともありました。ただ私が三交代でし

かも残業が多いので、夫が定時で帰ってきてくれたのがすごく助かりましたね。ほんとは残業もあつたんだと思いますけど。私が妊娠中は育児時間もとつてくれたりもしました。

青木 お子さんは三年生、一年生、四歳でしたっけ？ そんな時に組合専従をしようと思われたというのはすごいですよね。まあ土日は休みだよという甘い言葉はあつたのかもしれませんが（笑）。

川崎 そうなんですよ、夜勤がないよとか（笑）。ただ、これまでは看護師としての専門的な勉強ばかりをしていたんですが、専従になってからは、東京に出てくる回数も増えて、いろんな勉強、社会情勢のことを学ぶ機会も増えて、まだわからないことも多いんですけど、視野が広がつたというのはすごく感じますね。

青川 私の場合、心がけているのが、なるべく言葉にして伝えるということなんです。困っていることはとくに。職場でもそうですし、家でも。察してほしいと

立ということでは？

保井 私も組合関係でけっこう東京に出ることもありますが、家族の理解はいちばんありがたいですね。母がそばに住んでいるので、そこはけっこうラッキーなんですけれども、最近は夫も簡単なものなら料理もしてくれるようになって、一番理解があります。それと、組合の集會でも託児所が用意されているようなときには、子どもたちを連れて行きますね。託児所はすごく助かります。

### 女性の「活躍」について思うこと

青木 安倍政権が言う「女性の活躍」については、単に女性を労働力としてみるというような視点で、最初は「活用」などという言葉を使って、みんな反発をしてみました。ただ職場のなかや社会、組合のなかも含めてほんとうの意味での男女平等を実現するというのは必要ですよ。そういう意味で、みなさんが思う女性の活躍のイメージであつたり、働き方、

それに関しての自分の決意でもいいですし、少しお話いただけませんか。

佐藤 「女性の」と付いてしまふ段階で、主が男性で女性が付属物のような感じを受けますね。社会はいろいろな状況の人が集まつて成り立っています。「誰もが活躍できるようにするには」という言い方にどう変えていくかの方が大事なかなと思ふんです。男性も女性も関係なく公共サービスを提供する仕事をしているということでは同じだし、もちろん家族状況や体調面など働き方とか残業の仕方はいろいろあるかもしれないけど、誰もが働き続けられるようにすること、いろいろな働き方を選択できること、それを認め合えることが大切だと思ふます。また、貧困の連鎖や格差社会などと言われていますが、女性をはじめ社会的弱者にさまざまなしわ寄せがいつています。複合的な課題を抱えて生きにくさを感じている女性はたくさんいます。そこを解決しないで、「自分の力で活躍しなさい」という

か、不満でも黙ってやってしまうということも日本の女性の人はしがちなんですが、昨日も同僚の方と、それってかなり傲慢な考え方だよって話をしています。

青木 なぜ私が困っているのがわからないの？ みたいなね。

青川 そうなんです。それでなんとなく不機嫌になってしまうみたい。そうじやなくて、私はこれに困っているから、こう協力してくれないかとか、あるいはこれならできると、なるべく言葉にして伝えるようにしています。そうすると、思ってもいなかったところから手を差し伸べたりするので、言葉にすることを怖がらないように、組合活動もそうですけど、言葉にすることで始めて認めてもらつたこともいっぱいありますし。

青木 やはりいろいろな人の助けがいる場面つてたくさんあつて、それをきちんと言葉にすることは確かに大切ですよ。保井さんはどうですか。仕事と生活の両

のはおかしいですよ。

川崎 私もよく似た意見なんですけど、むしろ男性に目をむけて、女性がつている制度とか、あたり前のようになっていることを男性も同じように、育児に対して、介護に対しても、いまある制度を男性に積極的にとつてもらつたりしたら、どうなのかなと思ふんですよ。

青木 育児休業とか、育児時間とか、男女とも取得できますからね。

川崎 ですよ、でも少ないじゃないですか。実は私自身も二〇一五年から県庁の女性活躍推進委員会というものに参加させていただいて、まだ一回しか出てないんですけども、いろんな女性の意見がこのなかであります、県庁の職員の方などは、定時で一日帰って子どもの送り迎えをして、ご飯を食べさせて、また七時に役所に戻ってくる方もいると聞いて驚きました。

青木 育児休業で言えば、国家公務員（二・一％）よりも民間企業（一・三％）

の方がちよつと低くて、民間よりも地方公務員（一・五％）の方が低いんですね。とりやすい環境にあるはずなのにとれていない。男性の育児参加をどう促すかは自治労が直面している課題でもあります。これが女性の働き方を変えることにすこくつながるのかなと思いますね。

芦川 私安倍さんの言う「活躍している女性」に非正規はハナから入っていないんじゃないのって言いたいですね。非正規や非常勤というのを部品のように捉えている風潮があると思うんですね。やりたかった仕事に就いて、その職場がよかつたらなおさら、そこでずっと働き続けたいという思いは、人間だったらあたり前にわいてくる感情で、それを否定しないでほしいなと思います。非正規・正規に関係なく、結婚もすれば出産もしますし、親や自分が病気で働けない期間は誰にでも訪れることなので、その時に、不安のなかで仕事を続けている人がすぐとなりにいる社会なんて、ぜんぜん女性の

活躍している社会なんかじゃないと思うんです。

青木 「活躍」だなんて言う前に、そういう不安を取り除いて、普通に仕事ができる環境を整えることが先ですよ。

保井 私はやっぱり男性の考えを変えないことには進まないと思います。男女雇用機会均等法ができたのはもう二〇年前でしょう？ でも現状はぜんぜん変わっていません。昇任試験の面接を受けるにしても、向こう側は男性ばかり。これってどうなんだろうってすごく思っ（笑）。女性が自分たちで発信していかなければいけないのもわかりますが、やっぱり男性も一緒に変わっていかなくてはならないから、女性の活躍なんてないんじゃないかなと思うんですね。

今回の女性の活躍の計画をつくるにあたってアンケートを取ったんですが、高松市では一〇年前に採用された男女の職員が、この一〇年で残った男性は一〇〇％、一方で女性は五六％しか残ってない

んです。

一同 えー!! そんなに辞めてるの？

保井 私もびつくりして。女性の活躍なんてぜんぜん遠いなとすごく実感しました。とくに出産で辞めるのは、専門職の方が多いですね。一般行政職はそれほどでもないんですが、看護師さんとか、保育士さんとかはとも多いですね。

青木 何が足りなかったのか、何を整備すれば仕事を続けることができたのか。公務職場は、仕事と子育てを両立しやすいはずなんですよ。でも約半分というのは驚愕です。

やっぱりみなさんがおっしゃるように、男性の働き方、意識も含めて、変わっていないことには、女性だけががんばったところで限界はありますよ。まず男性が変わっていくことこそが、女性の「活躍」への第一歩である、そんな結論が見えてきたように思います。ありがとうございます。